



北海道遺産
Hokkaido Heritage



その先の、道へ。北海道
Hokkaido. Expanding Horizons.

北海道遺産 第3回選定の決定について

北海道遺産協議会
2018年11月1日

第3回選定の概要

- 北海道遺産候補の応募受付（2017年12月～2018年3月）

- 申請総数64件

- 審査（2018年4月～8月）

- ＜審査員審査＞

- 観光、地域振興、歴史・文化、建築、経済活動などの各分野の専門家、協議会理事、協議会PTメンバー、計24名による審査

- ＜理事会による決定＞

- 各審査員による客観的評価結果に基づきつつ、北海道らしさの視点と、担い手組織による地域に根ざした保全・活用の活動が具体的に目に見えるもの、その手法や成果が他の地域にとってもモデルとなり得るものを重視

第3回選定の概要

・北海道遺産の目的・主旨

有形・無形の様々な遺産を、多様な人々がシェア（共有）する仕組みをつくることで、北海道の「宝物」を次世代に継承する

・選定の3つの視点

- 1_【過去】北海道にとっての価値＜ストーリー＞
- 2_【現在】地域の思い出＜担い手＞
- 3_【未来】持続可能性＜アクションプラン＞

Sharing Heritage

シェアリング ヘリテージ

地域の遺産と人との
つながりを見つめ直す。



<シェアリングヘリテージとは>

特定の個人や団体、地域によって所有・管理されている文化遺産を、観光や教育、企業活動などを通じて多様な人々とシェア（共有）することで、新たな価値を創造することです。特に地域を物語るストーリーを明らかにすることでシェアを促進することができ、持続可能な遺産の保全・継承および地域の持続性や更なる発展を図ることが期待できます。

第3回選定の概要

・評価のポイント

	基準	観点
1	【過去】北海道における取り組みにより培われ、継承されてきた価値を有している	
	1 北海道にとっての顕著な価値を有しているか	北海道における顕著な価値
	2 関係する人びとが、長きにわたり継承してきた遺産であるか	継続性
	3 遺産の名称やストーリーが分かりやすく、かつ遺産価値を適切に伝えているか	明快性
	4 遺産の構成要素は、価値を説明するために充分であるか	完全性
	5 価値の根拠が、客観的かつ信頼性をもった形で提示されているか	真正性
2	【現在】現在、思い入れをもって遺産に受け継ぎ、利活用している	
	1 遺産に関わる担い手（3名以上）が存在するか	存在
	2 担い手は、これまで遺産の保全に取り組んだ実績があるか	実績
	3 多様な人びとが遺産を知り、理解し、保全の取り組みに参加しているか	巻き込み
	4 行政機関、民間企業、専門家などとの協働が見られるか	PPP
	5 地域活動の拠点やランドマーク、あるいは象徴的なコトとして、遺産は認識されているか	象徴
3	【未来】遺産を北海道の資産として、未来に受け継ぐことができる	
	1 短期的、および中期的な遺産のあり方について、将来像は明確か	現実性
	2 遺産の価値を損なうことのない保全の仕組みはあるか	持続性
	3 担い手が自律的に実行しうる遺産の保全活用計画はあるか	持続性
	4 観光や産業により、遺産を活用する仕組み・仕掛けがあるか	経済的活用の可能性
	5 学校教育や生涯学習、あるいは市民活動により、遺産を活用する仕組み・仕掛けがあるか	社会的活用の可能性
4	【総合】新しい北海道遺産のあり方への理解	
	1 遺産と人の関係について、より豊かにしなやかに、持続可能にするということを理解しているか	

北海道遺産（第3回選定分）一覧

利尻島の漁業遺産群と生活文化	札幌軟石
旭川家具	蝦夷三官寺（有珠善光寺、様似等澍院、厚岸国泰寺）
三浦綾子記念文学館と外国樹種見本林	しかべ間歇泉
増毛山道と濃昼（ごきびる）山道	むかわ町穂別の古生物化石群
北海道の集治監(樺戸、空知、釧路、網走、十勝)	北海道の簡易軌道
小樽の鉄道遺産	千島桜
大友亀太郎の事績と大友堀遺構	松浦武四郎による蝦夷地踏査の足跡
パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）	



利尻島の漁業遺産群と生活文化

～海の道がつくりあげたヒトとモノの交流史～



日本最北の利尻島には、近世以降の漁業と移住の歴史を物語る漁業遺産群がある。近世には松前藩、近江商人による交易場所がおかれ、アイヌがそれを支えた。島には、豊漁や航海安全を祈る神社や奉納物が残る。幕末以降は出稼漁民が松前や青森、秋田から渡り漁場を拓いた。その記憶は袋潤や番屋に、生活文化の名残は石碑や獅子舞などに込められた。島の産物は、鯨、昆布、海鼠、鮑などであった。とくに鯨は、鰯粕、身欠き鯨として本州に北前船で運ばれた。利尻島を行き来する海の道は「ヒトは北へ、モノは南へ」という交流史をつくりあげた。

<選定理由>

この遺産は、我が国最北端の離島（礼文島含む）で展開された近世からの漁業中心の海産物（昆布、魚介類）生産と海運を基盤とした交流により形成された北海道の開拓ストーリーのひとつです。今も交流史を体現する歴史文化遺産が豊富に遺されており、観光や社会教育のアプローチから島全体で保全活用するプランの将来性が豊かであり、地域づくりへの活用といったシェアリングヘリテージに期待します。



旭川家具

～木製家具文化と世界につなぐ織田コレクション～



旭川家具の特徴は、良質な木材を生かし永く使い続けることのできる美しいデザインにあり、北海道の森林資源を生かして技術・技能に優れた職人を多く輩出するなど特出した優位性も併せ持つ。また、地域に公有化される織田コレクションは、世界の名作椅子と優れたデザインの生活用具で構成された極めて貴重な資料群である。家具を中心としたデザインの歴史を俯瞰できる織田コレクションは、地域の産業を世界に繋ぎ、更なる発展を目指している。

<選定理由>

この遺産は、北海道の豊富な広葉樹資源を背景とし発展した木製家具産業がもつストーリーの一つであり、とくに木材産業の規模が大きい旭川の家具に関する技術・技能、作品、意匠、資料群といった文化、および地域の特性や旭川家具産業を育てた関係者の熱意を評価しました。またその背景となった「織田コレクション」は、旭川の職人たちが、今も世界で評価されるデザイン性の高い家具を生み出す原動力としての存在も大きく、北海道の木製家具文化のグローバルな展開への活用といったシェアリングヘリテージに期待します。



三浦綾子記念文学館と外国樹種見本林 ～三浦文学がつないだ市民が守り育てる森～



「北海道は私の文学の根っこ」と語り、35年にわたって書き続けてきた作家・三浦綾子の“聖地”と言えるのが外国樹種見本林。代表作・デビュー作『氷点』の舞台である。ここに建つ三浦綾子記念文学館は市民運動で生まれ、歩みを続けてきた。2018年9月には、「口述筆記の書斎」を擁する分館も建ち、旭川駅から「氷点通」「氷点橋」「三浦綾子文学の道」を経て見本林へと続く道は、“三浦文学ワールド”と呼ぶにふさわしい。市民が守り育てる文学と森は、氷点のまち・旭川を象徴する癒しと憩いのスポットである。

<選定理由>

北海道は明治期から我が国の森林事業の重要な拠点で、特に大雪山国立公園を持つ旭川はその中心であり、その歴史を今も見るのが外国樹種見本林であることから評価しました。また、20年前に建設された三浦綾子記念文学館の「市民の手で守り育てる」独自の民営手法は、全国的にも注目され、多くの市民が関わる見本林の保全活用や地域の行政・企業と連携した周辺環境の整備等の取り組みや将来への展望といったシェアリングヘリテージに期待します。



増毛山道と濃昼（ごきびる）山道 ～近代化に先駆した開拓遺産とその再生～



開削から160年余の歳月を経て、3mを越すクマイザサの中に埋没し、記憶の彼方からも消え去ろうとしていた「増毛山道と濃昼山道」。近世北海道の開拓遺産として、大きな意義があると確信した地域住民を中心に、時には山中泊をしながら復元行動を開始してから約10年、往時の姿を残す良好な状態で遂に2016年に全線復元した。

北海道に残された山道の中でも、北海道の名付け親である松浦武四郎は「蝦夷地第一の出来栄」と評した希少な山道であり、近代化に果たした歴史的役割や機能を体感できる遺構。

<選定理由>

この遺産は、北海道の近世開拓におけるニシン漁等を背景とした陸上運輸を物語るストーリーの一つであり、さらにその後の周辺の国道整備によりその存在が忘れられようとする中、これらの山道の存在を後世に伝え、地域活性化につなげようとする地域の人たちの手によって、長い年月をかけ全線が復元された歴史的遺構として評価します。今後も、自律的な保全活用 of 取組みやトレッキングツアーなど積極的な活用といったシェアリングヘリテージが期待できます。



北海道の集治監（樺戸、空知、釧路、網走、十勝） ～北海道開拓を支えた近代化遺産～



北海道は北方にある地理性から、集治監（国立刑務所）の設置が集中した。建設は樺戸（現月形町、1881年）、空知（三笠市、1882年）、釧路（標茶町、1885年）、網走（1891年）、十勝（帯広市、1893年）の順であった。設置には原敬内閣の囚人使役容認決定があった。目的は初期の西南戦争政治犯収容、後期に重大犯罪人隔離で、北辺防衛と北海道開拓用の北見と上川道路・鉄道建設（樺戸、空知、網走）、幌内炭鉱開発（空知）、硫黄鉱山開発（釧路）、農地開発（帯広）等で、北海道の初期インフラ整備と地方文化形成をになった。

<選定理由>

この遺産は、北海道の近代開拓における内陸開発を物語るストーリーであり、また本州の最高建築技術と文化が導入された近代化遺産としても評価しました。とくに北海道には北方という地域性から、明治期から国立刑務所（集治監）の設置が集中し、囚人労働による、上川道路、北見道路の開削、炭鉱（三笠）などの使役が北海道の内陸開発を推し進めた「負の遺産」とも言えます。今も、網走や樺戸を中心に、当時の施設や道具類を見ることができるとともに、全道のネットワーク展開への期待、さらには北海道開拓の裏の真実として後世に伝えていくといったシェアリングヘリテージに期待します。



小樽の鉄道遺産

～未来に守り伝える北海道最初の鉄道の歴史～



明治13年11月28日、小樽手宮—札幌間に、アメリカ人技師クロフォード指導のもと、待望の鉄道が開通。2年後、幌内炭鉱に到達し、石炭の搬出が開始された。港—鉄道結節のまち小樽は急速に発展し、北海道の開発を先導するまちに成長。石炭から石油に、港も日本海から太平洋に移ったが、北海道の発展を支えた鉄道遺産は、国の重要文化財、鉄道記念物にも指定され、野外展示の約50両の車両を含め、鉄道技術の発展を示す貴重な近代遺産として保存されている。また近年、線路跡に散策路を添わせ、各種イベントの会場としても親しまれている。

<選定理由>

この遺産は、北海道の近代開拓における北方警備、資源の開発という二つのストーリーにおける生産—輸送の産業に係る総合的なシステム（炭鉄港）を構成する鉄道遺産として評価しました。また、今も地元保存会による旧手宮線跡などの保全活用の取り組みへの活用といったシェアリングヘリテージに期待します。



大友亀太郎の事績と大友堀遺構 ～札幌開基の源流と技術の現代的意義～



北海道開拓の中心である札幌の開基は、幕末の大友亀太郎の札幌村建設と大友堀の開削に始まる。大友は慶応2(1866)年に本州土木技術の後継者として大友堀と札幌村建設を主導した。堀は4 kmに及び、その一部は現創成川として残り、これは島義勇による札幌の東西の起点となった。大友は明治3(1870)年に札幌を去ったが、その事績は札幌市東区の札幌村郷土記念館内大友関連展示と文書資料で見られる。大友堀の現地遺構は、急速な札幌市の都市化で大方は消失し一部は道道花畔札幌線近辺に残り、貴重な都市歴史遺産として保存されている。

＜選定理由＞

この遺産は、北海道の近世開拓の一つのストーリーであり、とくに農業開拓の基盤づくりであり、札幌開基の源流となった取り組みと遺構を評価しました。また、今も大友亀太郎の業績を語り継ぐことを目的に建設された札幌村郷土記念館には関連する貴重な資料が保存され、保存会による様々な研究やPRなどの丹念な取り組みが見られ、さらに大友堀遺構は、現在の創成川のルーツであり、札幌の基盤の目の街区の基点となっており、札幌市の都市軸のひとつとしてこれからのまちづくりを考える上での役割といったシェアリングヘリテージに期待します。



パシフィック・ミュージック・フェスティバル (PMF) ～豊かな風土に根ざした世界につながる教育音楽祭～



パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）は、20世紀を代表する音楽家、レナード・バーンスタインが1990年に創設した国際教育音楽祭。毎年夏の1カ月間、世界中から厳しいオーディションで選ばれた若手音楽家（アカデミー生）が札幌に集い、欧米トップオーケストラで活躍する首席奏者等の指導を受ける。その成果は、札幌を中心に道内各地の演奏会で披露され、北海道の夏の風物詩として定着。これまで参加したアカデミー生は総数3,500名を超え世界各地で活躍中。北海道から世界に発信する文化事業として成長している。

<選定理由>

この遺産は、近代開拓期から札幌を背景に形成されてきた都市文化を物語るストーリーの一つであり、世界的指揮者レナード・バーンスタインでの提唱で創立され、世界のアーティストを札幌に集め、音楽を世界水準に高めることを目的とし、多くの地域住民によって支えられ活動してきた28年間の活動実績と未来の音楽家を応援し育て続けている仕組みを評価しました。また道内各地の北海道遺産でのコンサート活動といった既存の遺産との連携による広がりなどといったシェアリングヘリテージに期待します。



札幌軟石

～北海道の産業とくらしを支えた石文化～



札幌軟石は、4万年前、支笏火山の大規模な噴火による火砕流が札幌周辺で冷えて固まった岩石（溶結凝灰岩）である。加工しやすく、耐火・防火性に富んだことから、明治初期より札幌をはじめ北海道内の建造物に多く用いられ、個性的な景観も形づくった。古い石蔵がカフェなどに再利用され、採石場跡は公園や緑地として市民に親しまれているのみならず、軟石は現在も市内南区で採掘され、近年は建物の仕上げ材としても人気がある。また、軟石の雑貨が商品化されるなど、札幌軟石の文化は今も脈々と受け継がれている。

<選定理由>

この遺産は北海道の開拓を支えてきたストーリーのひとつで、開拓使が廉価な不燃建築建材として軟石の使用を勧め、札幌の倉庫や商店の蔵などを中心に数多く普及し、北海道の産業と暮らしを支えた石文化として評価しました。今も、札幌市内最大の産出地であった石山地区では、採掘が続けられるとともに「石山緑地」として再利用（野外博物館、演劇場）されており、さらに地元住民や保存会・企業などによる札幌軟石の魅力を発信する取組みが広がりを見せており、地域づくりへの活用といったシェアリングヘリテージに期待します。



蝦夷三官寺（有珠善光寺、様似等澍院、厚岸国泰寺） ～未来に伝えるアイヌと和人の関係史～



蝦夷三官寺とは、江戸幕府が1804年に現在の伊達市・様似町・厚岸町に建立した3つの寺院の総称である。各寺は蝦夷地で死亡した和人の葬儀とアイヌ民族への仏教布教を目的とし、背景には対ロシア政策として幕府による蝦夷地支配を示す狙いがあった。しかし、アイヌと和人の文化接触は比較的緩やかであったため、アイヌ文化の儀礼・祭祀の独自性は損なわれず、かつ各寺に対する信仰と崇敬の念が保たれたまま今日に至っている。そこには明治期以降とは異なるアイヌと和人の関係史がみてとれる。

<選定理由>

この遺産は北海道を物語るストーリーにおいて重要な要素である北海道開拓のひとつです。その中でも江戸時代中後期から、札幌を中心とする洋式の開発ストーリー以前の沿岸開拓中心に行われたものとして評価しました。今も、伊達市善光寺、様似町等澍院、厚岸町国泰寺に貴重な社寺文化遺産（国泰寺『日艦記』など）を見ることができ、さらにそれを活用した3町のネットワーク形成と多くの共同企画などの取り組みと将来への展望といったシェアリングヘリテージに期待します。



しかべ間歇泉

～人々が守り育てた空高く噴き上げる温泉～



「しかべ間歇泉」は、大正13（1924）年、温泉の掘削中に偶然発見された。この資源を活用した地域の温泉旅館は、海の恵みを楽しみつつ湯治できる場として栄え、今日の“海と温泉のまち”を築いた。町内30か所以上の泉源のなかでも、103度の高温の温泉が10分から15分間隔で約500ℓ、高さ約15mまで噴き上がる特徴があり、全国に複数ある間歇泉のなかでも、発見されてからこれまで、衰退することなく一定の噴出間隔と温泉量を噴き上げている。代々、地域住民の手により大切に守り継いできた“地域の宝”は、鹿部の大地を潤し続ける。

<選定理由>

この遺産は、活火山が多い北海道において、噴火に関する被災への対応を物語るストーリーの一つであり、北海道駒ヶ岳噴火の地域復興のシンボルであり、間欠泉というアクティブな温泉資源を地域一体として守り育ててきた価値を評価しました。今も、漁業をはじめとした地域の一次産業、観光や福祉との連携、温泉資源を利用した新産業の創出など、間歇泉をまちづくりの源とした様々なプランは、シェアリングヘリテージの大きな可能性を期待します。



むかわ町穂別の古生物化石群 ～恐竜時代の息吹が伝わる日本有数の海と陸の化石群～



むかわ町穂別地域は、古くから古生物化石の宝庫として研究者や愛好家に知られる。海底の地層が分布し、道天然記念物のクビナガリュウ化石『ホベツアラキリュウ』をはじめとする海生爬虫類やアンモナイトなどが多数産出。地元産の貴重な化石資料を収集・保管・展示する穂別博物館を有する。さらに近年、国内最大の恐竜全身骨格化石・ハドロサウルス科『むかわ竜』が発見され、全国的な注目を集める。日本有数の海と陸の古生物化石が揃う博物館には、国内外の第一線で活躍する研究者が集い、また、子どもたちの学びの場ともなっている。

<選定理由>

この遺産は、北海道がまだ海であった太古の昔の豊かな生態系や生物相を垣間見ることができる貴重な環境を背景とする日本最大級の古生物化石産出地帯（蝦夷層群、穂別、三笠、羽幌、中川）がもつ一つのストーリーです。なかでも、近年発見された「むかわ竜（通称）」は日本初の大型恐竜全身骨格として国内外から注目され、他にも「ホベツアラキリュウ」などのクビナガリュウやモササウルスなどの海生爬虫類やアンモナイトなどを多数産出するむかわ町穂別地域は、顕著な地区として評価しました。現在、地元では町民主体の活動組織である「むかわ町恐竜ワールドセンター」をはじめ、道内外の関係自治体、団体や企業等との連携による化石資源を活かした地域づくりへの活用といったシェアリングヘリテージに期待します。



北海道の簡易軌道

～次世代に伝える開拓遺産としての鉄路～



大正末期から昭和40年代の約50年間、簡易軌道は北の大地の開拓を支えた。入植者の生活に欠かせない存在であり、今も多くの人々が記憶している。簡易軌道は農業・酪農地域の労苦と発展を語る上で、不可欠な存在であるといえる。村営軌道の遺産は、村の強みである美しい自然の保全と共生を推進するとともに、新たな地域資源を活かした観光の起爆剤となり得る。今後は、簡易軌道がかつて存在した他の自治体とも協力体制を構築し、全道的に簡易軌道の歴史を伝え、活用する仕組みをつくっていくことを視野に入れた活動を目指す。

<選定理由>

この遺産は、北海道の近代開拓の運輸を基軸としたストーリーの一つであり、とくに大正後期から道東・道北を中心に国鉄線から開拓地へ毛細血管のように伸び、人々や農産物を運び、地域の発展に大いに貢献した鉄道遺産として評価しました。今も、当時の旅客輸送を担った自走客車などの実機や関連施設が残っており、地元自治体によるその保存と活用、釧路市博物館や鉄道愛好団体等と連携した、地域の歴史を次世代に引き継ぐための様々な熱意ある取組み、北海道内に残された遺産群に関する地域とのネットワーク形成などへの活用といったシェアリングヘリテージに期待します。



千島桜

～北方領土を未来につなぐふるさとの花～



毎春、桜前線が北上し、最後に咲く桜として多くの人に親しまれている千島桜。
かつて北方領土に住んでいた人々には、「ふるさとの花」として親しまれており、根室市の清隆寺にある千島桜は、国後島から持ち帰り移植され、道内の多くの千島桜の源流と伝えられるなど、「千島桜」と「北方領土」との結びつきは深い。また、千島桜は北海道の植樹用の樹種として選ばれることが多く、官・民による地域づくりの資源の一つとして、次の世代へ継承したい花である。

<選定理由>

この遺産は、北海道における貴重な在来種に関する自然遺産であり、北方植物研究のパイオニアであり、北大を代表する植物分類学研究者である札幌農学校2期生の宮部金吾博士が、論文中に千島に自生する桜をチシマザクラとして記したストーリーや、北方領土とのつながりを示すことを評価しました。今も、千島桜の名所となっている根室の清隆寺の桜など、寒さに強く丈夫に育つことから道内各地で様々な機会に植樹種としても採用されており、北海道固有種の桜のつながりと北方圏の新たな発展といったシェアリングヘリテージに期待します。



松浦武四郎による蝦夷地踏査の足跡 ～6度にわたる踏査の業績を未来へ～



松浦武四郎（1818-1888）は、アイヌの人たちの助言と協力を得ながら6度にわたって蝦夷地を踏査した。膨大な報告書を幕府に提出したほか、明治政府に必要とされ開拓判官に就いた。武四郎の業績は、北海道の沿岸・内陸を問わず踏査し膨大な記録を作成したこと、蝦夷地に関する多くの書物を出版したこと、北海道の名づけ親としてまた、国・郡の範囲を定めその名称を選定したこと等が上げられる。北海道各地にある身近な足跡に触れることから、その業績を知らしめ親しまれ将来に伝える手掛かりとなることを期待したい。

<選定理由>

この遺産は、ロシアの南下が懸念される近世の北海道の状況を物語る「北海道命名」のストーリーとしての価値を評価しました。今も、6度にわたる膨大な踏査記録が遺されており、フットパスやサイクリングなど観光や教育等などをとおし、新たな北海道の地域づくりへの活用といったシェアリングヘリテージに期待します。